

# 辺境都市の育成者

始まりの雷姫

七野りく

---



ファンタジア文庫

2994

C O N T E N T S

# 辺境都市の育成者

始まりの雷姫

The mentor in a frontier city The beginning thunder lady

プロローグ

大陸統一暦一二〇五年春 帝都ギルハ

005

第1章

021

第2章

090

第3章

152

第4章

226

エピローグ

299

あとがき

310

口絵・本文イラスト 福きつね

『いいかい、レベッカ？ この世界は君が思っているよりも、ずっとずっと広いんだ。帝都に行けば君もそのことを少しは感じられると思う。だから、今は素直すなおに行っておいで。あそこにはとても強い冒険者ぼうけんも多いから』

そう私の師で【育成者】と嘯く青年に言われ、私がロートリンゲン帝国帝都ギルハに来てからもう二年以上になるだろうか。

確かにあいつの言う通り、当時の私が知っていた世界は本当にちっぽけ。それはこっちにきて、散々思い知らされた。

とても人とは思えない恐ろしい剣士けんしや魔法士まほうしにも遭遇そうぐうして、何度も死にかけもしたし。何より、端的たんてきに世界の広さを感じさせるのは――

「今日も人が多過ぎ、ね」

帝都旧市街を貫く大通りの人混みひとごみを縫ぬいつつ、私は小さく呟つぶやいた。

プロローグ 大陸統一暦一二〇五年春 帝都ギルハ

左手に持っている荷物が少々邪魔だ。師御手製の何でも入る道具袋に収納してくるべきだったかもしれない。

ここは正しく人種の坩堝。

茶髪でやや大柄な帝国人。

私のように白金か金に近い髪色で肌が白い王国人。

日に焼けた縮れた赤髪が特徴的な同盟人。

他にもエルフやドワーフ、様々な種族の獣人達。

私の知らない異国人もたくさんいる。

二年前まで私がいた辺境都市じゃ考えられない。

これらの人々は大陸最強国家の中枢であるこの大都市に毎日、国内外から様々な物品を運んで来るのだ。

北方から、南方から、東方から、西方から——貴重品や珍品には飛空艇や飛竜が使われる事もしばしば。

まるで、この国だけ時代の一步先を進んでいるかのようだ。

結果、帝国は——帝都を探してなければ大陸内にその品はない、と断言される程の繁栄を誇り、宿敵である王国や同盟が歯噛みするのを後目に、その人口は年々増加。都市自体

も拡大し続けている。

同時に、犯罪や荒事も増えているのは事実であり——

「だからこそ、私達みたいな冒険者が集まって来もするのよね」

独り言を零しつつ、私は目的地を目指す。

途中、店の硝子に自分の姿が映り、足を止める。

白金の長髪。二年前に比べると随分と伸びたと思うし、傷んでもいない。

同年代の少女達と比べると、やや背が高く、自分で言うのもなだけと華奢だ。

知り合いにはよく『レベッカは身に着けている純白の輕鎧と腰の魔剣がなければ冒険者に見えませんか。私服姿はどうみても深窓の御嬢様です』と、半ばからかわれる。

綺麗ななんて自分では分らないし、興味もない。だけどこの外見で嫌な目にもあつてきている。

二度と顔も見たくない父親なんて、自分の栄達の為に十三歳の私を二回以上上の男に嫁がせようとさえた。

でも、あいつが綺麗だっと思ってくれるなら、この見た目も悪くは——……はっ！

頭をぶんぶん、と振り。邪念を飛ばす。わ、私は何を、何を。

店内にいた女性店員が奇異な目を向けてきたので、そそくさとその場を離れる。



歩みを再開しながらこの二年間を思い返す。

——本当に色々なことがあった。

自分よりも格上の冒険者に現実を見せつけられ、強大な魔獣と戦い、この国へ復讐しようとした呪術師の企てを阻止し……。

思い返しながらい目を瞑る。

我ながらよく生きてるわね、ほんと。

何度も挫けそうにもなったし、あいつに宛てた手紙に泣き言を書いたことだってある。

そういえば、そういう時だけに優しい言葉で返事が来たっけ。……ズルい。

そして、辺境都市にいた頃に比べると随分と伸びた髪を弄りながら、私はある結論に辿り着く。

「結局、あいつが……ハルが見せてくれたもの以上に驚くことはなかったなあ」

今の私はあの頃よりもかなり修練を積んだし、修羅場や死線だっていくつか潜り抜けた。大きく成長できた自負もある。

だけど——あいつや姉弟子、兄弟子達に追いついたとは到底思えない。

この世界にはまだまだとんでもない強者や怪物が数多いのだ。

私は、左手に持っていた私の腕と同じくらいの長さの布袋を握りしめて、呟く。

「でも……これを見れば、あいつだって私をきつと一人前だって認めるはず！」

——ようやく目的地が見えてきた。

旧市街奥にそびえ立つ、帝都でも皇宮以外だと最大規模の建造物であるその白亜の建物は、聞いた話によると約三百年前に建造されたらしい。

——冒険者ギルド本部。

冒険者とは魔獣を狩ったり、迷宮に潜って宝物を探したり、傭兵をしたり……まあ、所謂、何でも屋だ。

それを統括しているのが『冒険者ギルド』——人類史上最大の組織。

大陸全土はもちろん、沿岸部以外は未開の地である南方大陸にすら支部を持ち、下手な国家よりも権力を持つ。

そんな組織の本部に配属されている職員はもちろん百戦錬磨。

各地のギルドで修羅場を潜り抜けてきた精鋭が集められているし、元上位冒険者だった者や、それに匹敵する実力者も多い。

私の今の担当者の子もそうだ。何より——古い付き合いの友人なので、信頼出来る。

きつとこの袋の中身くらい淡々と処理してくれるだろう。  
本部の入口へ向かいつつ、私は浮き立つ思いを抑えきれなかった。  
偶発的な遭遇戦ではあったけど、上手くいけばこれで――

「辺境都市に、ユキハナに戻る」

二年前、帝都に来る際した、師との約束を思い出す。

冒険者の実質的な最上位『第一階位』になったら戻っておいで』といった彼に私は、こう宣言した。

『私は特階位に――一人で龍や悪魔を狩れるようになるまで戻るつもりはないわっ！　そうすれば、胸を張って、私はハルの弟子！　って名乗れるもの!!』

それを聞いた時に、彼が浮かべた嬉しそうな笑みが脳裏に浮かび、口元がほころぶ。

――ギルド会館内は混みあっていた。

けれど、私は仮にも冒険者の最高峰である第一階位。待ち合いの札を引く必要はないので、そのまま窓口へ。

そして手に持っていた布袋を意気揚々と台上へと置いた。

「ジゼル、これお願い」

「あ、レベッカさん。もうっ！　何処へ行かれていたんですかつ？　心配して……え？」

私の担当である長く淡い茶髪で胸の大きい人族の女性――辺境都市在住時以来の付き合  
いであるジゼルは布袋から中身を出すなり、私の予想に反して顔を引き攣らせた。

「ひゃ!! ……レ……レベッカさん!？」

ジゼルは叫び声を呑み込むように自分の口を押さえた。

暫くして、彼女は錆びついた機械のように顔を上げると私に問いかけてきた。

「レベッカさん……何ですか？　こ、これ、は？」

「何って……見ての通り、牙よ」

「……………あえて、あえてお尋ねしますね。何の牙、ですか？」

この子だって《鑑定》スキル持ちなんだし、分かっている筈だ。

私は窓口の台に肘を突きつつ答える。

「《雷龍の牙》だけど？」

それまで賑わっていた周囲が一瞬、静かになった。

どうやら、私達のやり取りは注目されているらしい。

けど、私にとつてそんなのはどうでもいい。

私は一刻も早く、これを辺境都市へ届けてほしただけなのだ。

ジゼルが身を乗り出してきて、言葉を振り絞った。

「……レベッカさん」

「何？」

「何回、言えばっ、分かってくれるんですかつ！ 幾ら最高峰の第一階位である冒険者さんであっても、死ぬ時は死ぬんですよ!! まして龍に挑むなんて……無茶です、無謀です、自殺願望でもあるんですかつ!? ……………まさか、ソロじゃないですよね？」

「? ソロだけど??」

少女は頭を抱えて机に突っ伏す。

——この世界において、龍とは悪魔と並ぶ最強種の一つだ。

並の冒険者ではまず歯が立たず、毎年多くの猛者達が挑むも、その殆どが命を落とす。

しかし、それらを倒して得られる素材はその希少さ故に、天文学的な値段で売買される。富と名声を一気に手にできるため、冒険者なら誰しもが龍討伐に憧れるのだ。

かつての私もそうだった。

しかも……冒険者ギルドが認定し、注意喚起をする上位の龍や悪魔は天災扱い。

決して個人で挑むような生き物ではなく、国家単位で対処するような相手だ。仮に倒す

ことができたとすれば、大陸全土にその名が轟くだろう。

事実、つい先日、帝国東部地域の王国国境の村々を襲い、出現が確認された推定特級悪魔は、帝国・王国・同盟から即座に天災に認定された。

ここ百年以上、大規模戦争こそしていないものの、歴史的背景からいがみ合い続けている三列強があっさりとは共同歩調を取る程に、上位の龍や悪魔は恐ろしい。

冒険者ギルドから『個人での戦闘を原則禁止す』というお触れが出されるのも、無理はないのだ。

……私だって単独でやり合いたくなかったけど、遭遇したのだから仕方ないじゃない。肩を疎め、未だに頭を抱えている少女へ問う。

「ギルドで素材の買取りは出来ないの？」

ジゼルの顔が勢いよく上がった。

「そ、そういう話をしているんじゃないやせんつ。勿論、買い取らせていただきます。で、ですが、私の言ってるのはそういう意味じゃなくてですね……。今回は、偶々、牙を折ることができて、こうして生きて還って来られたかもしれませんが、幾ラレベッカさんでも、次は——」

言葉を遮り、さっさと告げる。

「一頭分あるから全部お願い」

「……………今、何て？」

「雷龍を討伐したのよ。首だけでも確認しておく？」

聞き耳を立てていたのだろう他のギルド職員、冒険者達が息を呑むのが分かった。

「なあ、今……雷龍を討伐した？　って言ったのか？」「私もそう聞こえた」「しかも、単独で？」「剣士が後衛の援護もなく!」「ど、どうすりゃそんなこと……」「いやでも、レベッカだぞ?」「と、いうことは」

しん、と静まりかえったギルド内で各人が目を合わせあい——突如、爆発するような大歓声が沸き上がった。

「ち、ちよつと静かにしてくださいっ！　まだ口外しないでっ!!　そこっ!!!　酒瓶をあけないでくださいっ!!!!!!」

ジゼルが騒ぎ始めた冒険者達を一喝する。

——龍を討伐した冒険者。

しかも単独での討伐者となると、大陸に数多い冒険者の中でもほんの一握り。以前の私なら周囲の冒険者達と同じ反応を示したと思う。

……だけど、この程度では、まだまだだということを私は知っている。

これでもようやく『入り口』に立てるかどうかなのだ。

片手を軽く上げ、冒険者達に注意している少女へお願い。

「騒がしくなったし、今日は帰るわね。明日また来るから、その時に全部引き取って。結構大きいから、訓練場も貸し切りにおいてもらえると助かるわ。その牙は何時でも通り送っておいで。超々特急で!——あと、これもお願いね」

ジゼルが慌てる。

「え?　レ、レベッカさん!　ちよつと待ってくださいっ!!　龍殺しだと、色々書いてもらう書類がつ!　特階位申請や【屠龍士】称号申請とかっ!!　皇宮にも呼ばれたりする場合もっ!!!」

「まーかーせーるー」

ジゼルに面倒な書類を丸投げし、牙とハル宛の手紙を押し付け、出口へ向かう。  
——手紙の返事、今回もすぐに来るかしら？

## ジゼル

誰がどう見ても美少女なレベッカさんが長くて綺麗な白金髪を靡かせ、あつという間に立ち去った後も、ギルド会館内部の喧騒は全く収まりませんでした。

私は自分の頬をつねってみます。

……痛い。夢ではないようです。

目の前には禍々しいとすら思える黒紫の龍の牙と大変可愛らしい花柄の封筒。

届け先は、何時も通り。『辺境都市ユキハナ』の冒険者ギルド。

宛名もこれまた何時も通り『ハル』。

裏返すといつも通り、エルミア先輩宛のメモ書き。

『開けずにきちんと届けなさいよ、似非メイド！ 絶対だからねっ！』

凛々しく、気高く、帝都でも有数の魔法剣士として知られる彼女とは思えない程、甘さが滲んでいます。

……昔の彼女を知っている身からすると、信じられないですね。

レベッカさんを追いかけて、辺境都市の冒険者ギルドから晴れて本部勤務になり、担当

指名されて早一年。

最上位へとどんどん駆けあがっていく彼女を見ましたが……今回の件は凄いです。

凄過ぎます。

「……ハルさんって、本当に何者なんでしようねえ」

私は深く深く溜め息を吐き、現実に向き直ります。

目の前には黒紫色の牙。やはり、夢ではありません。

おそらく、これだけで白金貨数千枚が動くでしょう。

龍素材の加工は極めて困難ではあるものの、その性能は折り紙付き。冒険者なら、誰もが憧れる代物です。装備に金を惜しむ冒険者は長生き出来ません。

牙一本でそうなのに……雷龍一頭分の素材となると……。

帝国直轄の管理入札制になることは間違いない、当分の間、大商人や大工房、国の研究機関や軍、有力冒険者達は何となく舞いとなるでしょう。

……その前に、主役が消えても大騒ぎをしている目の前の人達をどうにかしないといけないんですけど。

すると、背後から穏やかながらも疲れた声がありました。

「ジゼル君……彼女、また、とんでもない事をしたね……」

私の側にいつのまにか立っていたのは白髪の老人。耳は人族よりも細長く、年代物のローブを纏った、いかにも好々爺然とした人物です。

「ギルド長」

この御方こそ、大陸全土に根を張る超巨大組織冒険者ギルド、その頂点である本部ギルド長、その人です。

種族はエルフで年齢は軽く三百歳を超えているらしく、歴戦の勇士でもあられます。

そんなギルド長が疲れた表情で、呟かれました。

「彼女が帝都に出て来てから約二年になるが、まさか、この短期間で龍を討伐するまでになるとは思わなかった……彼女はまだ確か十代だろう？」

「十七歳です。冒険者になったのは十三歳ですね」

「……二年前の階位は、確か」

「帝都に来た時点では第五階位だった筈です。私が配属になった際はもう第一階位でしたけど」

「……………天才、とはいるものなのだな」

ギルド長が嘆息されます。

——冒険者の階級は、誰しも第二十一階位から始まります。

実績を積みば少しずつ上がっていきますが、彼女のように十代でここまで上り詰める人間は極めて稀。

多くの方々は一桁になることもなく、引退するか……道半ばで倒れます。

レベッカさんは僅か四年でそこまで辿り着いたことになります。

凄……とにかく、凄い。

途中、別れたとはいえ、その間の大半を一緒に過ごした身として彼女を、私は誇らしく思います。

ギルド長が手を伸ばし、牙に触れました。

「そういえば、これは先に競売に回してしまっていないのかな？」

「あ、いえ……何時も通りです、辺境都市へ送ります」

「また……『彼』にかね？」

「ええ、あの人に、です」

ギルド長が瞑目され首を振られました。

こういう経緯があるのかは知りませんが、この方もあの人を知っているんです。

何度か経緯を聞き出そうとしましたが、余程、怖い目に遭われたらしく、顔面を蒼白にされて教えてはくれませんでした。

私も雷龍の牙に触れます。

——本当に信じられません。

あのレベッカさんが。二年前は、捨て猫みたいだった女の子が！

それも全てはあの人に——『辺境都市の育成者』に、彼女が出会ったから始まったこと。

そう、始まりは今から約二年前。

まだ、レベッカさんが第八階位だった頃の——。

## 第1章

「レベッカさん——残念ですが、能力値も魔力も上がっていませんね」

冒険者ギルドの担当職員から告げられた言葉に、私は顔を強張らせた。

今日もなわけ……。

依頼された数より、相当多く魔獣を倒したのに何も上がらないなんて。

あれだけ、炎魔法を使っただし、せめて魔力くらい上がってもいいのに。

これで、もうかれこれ半年近くは足踏みだ。

……心配そうに、担当の少女が見つめてくる。

帝国辺境都市ユキハナの冒険者ギルド内では一番の美人と評判の子。確か名前はジゼル

……だったと思う。

淡い茶色の長い髪が目立つ。私よりも確か二つ年上なのに幼く見える。

祈るように握っていた両手を更にきつく握りしめ、私を見ている。

良い子なのだろう。仕事熱心で冒険者想いの。

……あまり馴れあうつもりはないけど。

「ありがたい。何か良い依頼があつたら教えて」

私は形式的な礼を述べる。

「はい。あの、レベッカさん……あまり気になさらない方が良いでしょう。その御歳で第八階位まで上られたのは本当に凄いんですから！」

「っ!!」

歯を食い縛り、怒鳴るのを自制する。

気にするわよ！ 当たり前でしょう!?

……私は強く、強くななきゃいけないのだ。二度と会いたくないあの男よりも。この世界を一人きりで生きていく為に。

二年前、私の父親だった男に告げられた、冷たい言葉が脳裏を過る。

『レベッカ、お前の婚姻が決まったぞ。例の侯爵家だ。何だ？ 不服か？ 我が血族ならば宿るべき雷魔法。その才無きお前をここまで育ててやった恩を忘れたのか？ 役立たずのお前が、この王国で他に出来ることがあるのか？ 幸いお前の外見は母親に似て整って

いる。それくらいしか役に立たないのだから、私に黙って従え！』

ふっ、と息を吐き、心を落ち着かせる。

……大丈夫。あの男のことだから私に追手を放っているのは間違いないけど、ここは王国じゃなく帝国。しかも、西南の僻地だ。見つかるにしてもまだ時間はある。

沈黙した私にジゼルがおずおずと尋ねてきた。

「レベッカ……さん？」

「え？ あ………大丈夫。気にしないわ。私はまだ十五歳だしね」

「そ、そうですよ。はい、今日の買取り金です。少しおまけしておきました」

「助かるわ」

「あ、はい。その、レベッカさん」

「……何？ まだ、何か用があるの??」

剣呑に問い返す。

少女が茶色の前髪を弄りつつ、躊躇い勝ちに口を開く。

「前々から御相談していた件です。……誰かと組んでみませんか？ ソロでここまで上られたのは、本当に凄いです。けど、冒険者ギルドとしては安全性を考えるとこれ以上は、も、



勿論、私が責任を持って信頼出来る方を探してきました！腕利きで、性格もよくて、向上心もあって、あ、あと女性の！」

「……………最初に言ったわよね？ 忘れたの？ 私は、ずっと一人でやるって。それが呑めないなら担当を替わってもらって構わないわ。——前の担当者みたいに」

「……はい。で、ですが！」

「それじゃね」

「レ、レベッカさん！」

少女の呼びかけを無視し、私はギルドの外へ。

……分かっている。ソロが危険なのは。

冒険者ギルドはしっかりとした組織で、出来る限り冒険者となった人間を守りつつ、育てていくのを指針としている。

私を知っている公的機関の中では、最もまともで頼りに出来る組織だとも思う。

けど——無理なのだ。

他者に命を預けられる程、私は人を信じる事が出来ない。

……血の繋がっている父親だけでなく兄達、そして、仲が良かった妹ですら私を政略結婚に差し出すのを止めようとはしなかったのだから。



\*

ベッドに寝転がり、宿の古い天井を見ながら考え込む。

——伸び悩んでいる。

そう、自覚したのはいつだったろう。

二回以上歳が離れた侯爵と政略結婚させられそうになり、王国にある実家から逃げ出して、帝国の辺境都市ユキハナに流れ着いたのは二年前。

冒険者になったのは、生きていく為にはお金が必要だったのと、自衛の力を得る為で、特段思い入れはなかった。

だけど——全てが自己責任なこの業界は、私の性に合っていた。

幸い剣も魔法もそれなりに使えたから、階位もドンドン上がっていき、順調そのものだった。『天才レベッカ』なんて、言われもした。

……少なくとも半年前までは。

私の今の冒険者階位は第八階位。正しく中堅どころ。

一流とは言い切れず、かといって二流でもなく、新米の時期は過ぎた——そんな、中途

半端な立ち位置。

これで私がパーティを組んでいたのなら、第八階位というのは中々の水準で、十分戦力として期待されていただろう。

けれど私は……単独行動を好む、ギルドが言うところの『ソロ』だ。

冒険者になった当初は、五〇八人程度の冒険者で『パーティ』を組み、大規模討伐にも参加したものの……どうしても、馴染めなかった。

それは私が王国出身だから——ではないと思う。

帝国は世界一の国力を持つ超大国。

移民にも寛容だし、この辺境都市にも様々な国出身、種族の冒険者がいる。

つまるところ、私自身の問題なのだ。

私は……政略結婚の件以来、他人を心からは信じられなくなっている。

一番仲が良かった妹ですら父親達の味方をした。どうして、他人が信じられるだろう？

誰かと組む気がない以上、私は独りで強くなるしかない。

——なのに、この半年間全く階位が上がっていないのだ。

剣術やその他のスキルの能力値、魔力も同様。こんなに長く上がらないのは初めてだ。

まさか、私の限界って、ここまでなの……？

ぎゅっと、目を瞑り、十五歳になっても、まるで膨らんできやしない胸に手を押しあて  
る。

(……何で、なんだろう?)

鍛錬は毎日欠かさず続けている。

自分よりも強い元冒険者に教えを乞うてもいる。

階位に合った怪物とも戦っているし、格上の敵を倒してもいる。

だけど、数値は上がらない。

実戦経験という、見えない部分は成長しているだろうけど、やはり数字も少しずつで良  
いから上がってほしい。

……ギルドに設置された鑑定石なんていう、はつきりと数字が出てしまふ、忌々しい魔  
道具が恨めしい。

とにかく、少しでもいいから上がってほしい。じゃないと——不安になる。

実家に戻る気は更々ない。けど、帝国内に頼れる人間もいない。

(私はもつと強くならなきゃ。そうでないと何時か連れ戻されて……)

不吉な考えが頭をよぎり、怖気が走る。

……ダメだ。

今日の夕食は外で美味しい物を食べよう。少しは気分も晴れるだろう。

私は所々傷んでいる髪を撫でつけ、ベッドから降り立ち、愛剣を手についた。

私が拠点にしている奇妙な名前の辺境都市ユキハナは、帝国西部一帯を表す辺境領の一  
都市だ。

最初に辿り着いた時は心底驚いた。

辺境領は帝国内でも田舎、と聞いていたのに、帝都と飛空艇で繋がっているわ、道路は  
きちんと舗装されているわ、人は多くて活気があるわ、冒険者関連のお店も多いわ……何  
より食事がとても美味しい。

王国が帝国に勝てないのはいしよがないと思う。帝都の賑わいはここの比じゃないらし  
いし。

私の住んでいた王国には田舎の一都市に空路を開いたり、道路を舗装する、という考え  
方はない。発展しているのは王都周辺だけだ。

多分、それはこれから先も変わらない。

王国を実質的に支配している大貴族達は、自分達以外の貴族や民衆が力を持つことを、

殊の外<sup>ほか</sup>恐<sup>おそ</sup>れてゐる。全て大貴族の中だけで物事を決めていたいのだ。

……ほんと、ろくでもない連中だと思ふ。

私は気分を無理矢理変え、独白する。

「とにかく、今は美味しい物を食べて、元気を出さないと！」

宿のある小道を抜け、大通りに出ると多くの冒険者<sup>ぼうけん</sup>達が歩いてゐた。

駆け出しから、中堅。少ないけれど熟練者もいる。それを客とする屋台も多く出て賑わつていて、食欲をそそる匂いが立ち込めている。

ジゼルから前に聞いた説明を思い出す。

『辺境都市は帝国内だと同じ西部にあつて、『大迷宮<sup>めいぎゆう</sup>』を抱<sup>かか</sup>えている迷都<sup>めいど</sup>ラビリヤや、経済・政治の中心である西都トヨ、それに帝都ギルハと並んで、冒険者の数が多いんです。なので自然と商売も冒険者相手のものが盛んになっているわけです。……他の冒険者を擁する都市と比べると格としては、一番下なんですけどね』

確かにそれは分かる。辺境都市には、私も含めて若い冒険者がとても多い。

周囲にいる魔獣<sup>まじゅう</sup>も、基本的には——時折、違う地方から流れて来た厄介なものもいるけれど——戦いやすい相手ばかりだ。

とにかく、まずはここで腕を磨き、名前を売る。

その後、迷都や西都、帝都へ移動していくのが、多くの冒険者達の辿る道らしい。それが所謂、帝国にいる冒険者にとっての三大都市。

とにかく多くのお金を稼<sup>かせ</sup>ぎたい人は『迷都』へ。

お金以上に人脈を築きたいならば『西都』へ。

社会的地位を得たいならば——最激戦区『帝都』へ。

冒険者の格付けとしては、帝都にいる人達が最上位。

次いで、西都。

迷都は二都程ではないものの、上位に君臨している冒険者の質では決して劣らない、と聞いている。

勿論、帝国には北や南、東にも大都市があるけれど、鉾山都市だったり、商都だったり、軍都だったりして、一般の冒険者の活動はそこまで活発じゃない。

なので、私も何れは三都市へ行き自分の腕を更に磨きたい、と思つている。

ただし、どの都市へ行くのにも、冒険者ギルドのお墨付きである推薦状は必須だから、結局、強くないといけないのだけれど……。

私はまだ遭遇した経験はないものの、上位の魔獣の中には人を喰らい、力を向上させる個体もいるらしく、冒険者ギルドは大都市圏で仕事をするソロ冒険者を第五階位以上の猛者限定、としているのだ。

——強くないと、先へは進めない。

若干、落ち込みつつ歩いていると、顔馴染の冒険者や店の主人から声がかかったので、手を振る。

ここに流れ着いて約二年、それなりに名前も知られるようになってきた。

美味しい行きつけのお店も出来たし、少ないけど友人がいない訳でもない。

今日は買取り金も手に入ったし、ちよつと高めの定食屋へ行こうと思う。

大通りから路地へ入って暫く歩くと、木製の大きな看板が見えてきた。

『定食屋カーラ』

内陸にある辺境都市で魚介類を食べられるお店は少ないのに、このお店の売りはなんと海鮮料理である。

輸送費用を考えれば、多少高くなるのも仕方ないというものだ。

夕食にはまだ少し早いせいか、私以外に客はいないようだ。

店先から中の様子を覗いていると、元氣な声がかかった。

「いらつしやいませ！ あ、レベッカさん」

「こんばんは。大丈夫かしら？」

「はい、勿論です！ ここ最近、来られないからどうしたんだろう、つて、さっきお父さんと話してたんですよ」

「この通り無事よ」

「良かったあ」

少し赤みを帯びている三つ編みの髪を揺らしているこの子はカーラ。お店の看板娘であり、店名の由来でもある。私と同年で数少ない友人だ。

カウンターへ通されておまかせ定食を頼む。

「ロイドさん、何時もので」

「——ああ」

厨房内から素っ気ない返事。

その時だった、店内に大声が響き渡った。

「お！ レベッカじゃねえかあ」

……嫌な奴の声が聞こえた。

粗野だった父を思い出してしまい、身体が少しだけ震える。無視を決め込む。

「おい！ 無視すんじゃないやねえよ！ 聞こえてんだろ！」

「……うるさいわね。お店の迷惑になるでしょ」

「やっぱり聞こえてんじゃないやねえか」

店先から、ニヤニヤといやらしい笑いを浮かべこつちを見ていたのは、野卑で嫌悪感を抱かせる雰囲気をつたった髭面の大男だった。……貴族の出、っていう噂、絶対嘘ね。名前はダイソン。

両腰には片手斧を下げ、分厚い金属鎧を身に纏い、鎧の中央には耐火の赤い魔石がついている。

こんな男でも私と同じ第八階位の冒険者だ。……つい先日まで第九階位だったけど。

——同時期に辺境都市へ流れ着いた当初、ダイソンは私を露骨に見下していた。

その為か、私があつという間に差をつけたのを随分と根に持ち、今は追いついたことを自慢したくて仕方ないようで、こうして絡んで来るのだ。

ダイソンはにやつきながら近寄ってくると、私の許可なしに隣へ座り、しかも椅子を寄せてきた。嫌悪感で肌が粟立つ。

「ギルドで聞いたぜえ？ そろそろ第七階位かと思えば、まだ上がってないみたいだなあ、レベッカ。ええ？」

「……あんたには全く関係ないでしょう？」

「はん！ 俺は知ってんだぜ？」

「……何をよ？」

「お前は、この半年、足踏みしているらしいなあ？」

「……………」

どうしてこいつが知ってるんだろうか？

ギルドが漏らした？

いや、それは考え辛いわね。わざわざ、信頼を崩壊させる意味がないし。

ダイソンが気持ち悪い猫撫で声を出す。

「諦めてうちのパーティーに入ればいいんじゃないやねえか？ 俺様が、夜も含めて可愛がつてやるよ。どうせ、お前まだ生娘だろう？ なあ？ つ！」

手を伸ばし太ももに触れて来ようとしたので、小さな火球を生み出し牽制する。

けれど、鎧の赤石が明滅し火球が消えた。……うざったいつ。

少しだけ焦ったダイソンだったが、すぐにニヤつく。

私は声の震えを悟られないように、冷たく吐き捨てる。

「……………」鏡で自分の顔を見て言えば？」

「ああ？ つけあがるんじゃないねえぞ。俺様の階位が上になった時、泣いてパーティ入りを懇願しても——」

「小僧。うちの店で何してやがるんだ？」

静か。それでいて、絶対的な問いかけ。

お店の主人であり、カーラのお父さんでもあるロイドさんが、料理の手を止め、ダイソンを鋭い眼光で睨みつけていた。

手には巨大な包丁。浅黒い肌をした腕は丸太のように太く、傷跡だらけ。

頭は丸刈りで頬にもかつての戦闘で受けた、深い傷跡。

「ちっ……俺は客だぞ？ 幾らかつて高位冒険者だったからって、そんな態度をとって良いと思ってるのか？」

視線に気圧され、ダイソンは忌々しそうにしながらも立ち上がる。

対してロイドさんは包丁を容赦なく放り投げた。

超高速でダイソンの耳元を掠め、壁に突き刺さる。一喝。

「出て行きやがれっ！ 次は当てるぞっ!!!」

ダイソンが少しだけ青褪めた。

「……ちっ。おい、レベッカ覚えておけよ。お前は必ず俺様のモノになる。そいつは決定

事項だからなっ！」

そう言い捨ててダイソンは店を出て行った。ほっと、する。

「大丈夫か？」

さつきとはうって変わって、ロイドさんが気遣ってくれる。

私は鎮くと謝罪と礼を口にする。

「……すいません、ありがとうございます。流星は元第三階位。威圧感が違いますね」

「レベッカさん！」

カーラが飛びついてきた。大きく震えている。……私の身体も同じだ。

「ごめんなさい。止めようとしたんですけど、あの人、強引に……」

「うん、大丈夫よ。ありがとう」

「嬢ちゃん、一ついいか」

ロイドさんの目が此方を見据える。そこにあるのは——憂い。

この人からは辺境都市に来て以来、助言を受けたりしているのだ。私も背筋を伸ばす。

「お前さんは何時も気負い過ぎだし焦り過ぎだ。そんなじゃ足をすくわれるぞ。いい加減、ソロもキツイだろう？ パーティを組んだ方がいいんじゃないかねえのか？」

私は両手を握りしめる。顔もきつと引き攣っているだろう。

「……はい。そうなのかも、しれません……。ごめん、カーラ。今日はもう帰るわね……」  
「レベッカさん……」

ロイドさんに凶星を指され、私は項垂れる。  
居たたまれず席を立ち、店を出た。

——その夜はまるで眠れなかった。

\*

「ごめんなさい。今、レベッカさんにご紹介出来る討伐任務はありません」

翌朝、冒険者ギルド。

受付の台越しにジゼルが謝ってきた。

朝の鍛錬を終えても、ここ最近の漠然とした不安と鬱屈は収まらなかった。

こういう時は、思いつきり剣を振り回せる簡単な魔獣討伐任務でも、と思つて来たんだけど……。不発だなんて、本当についてない。

「そう……仕方ないわね」

「で、でもパーティーを組まれるなら……。ほ、ほら？ これとか如何ですか？ この辺りでは凄く珍しい長爪大熊討伐！ 報酬も美味しいですし、第五階位の方がリーダーで」

「……昨日も言つたわよ？」

「す、すいません……。あ、なら——す、少しだけ待つててください！」

そう言くと、ジゼルは受付の奥へと引つ込んだ。

待っている間に、近くの大柱に貼られている、各地の冒険者ギルドの報告書を眺める。

『黒灰狼の群れ、各地で消失相次ぐ。新種の魔獣によるものか？』

『東部地区において多数の巨猿の目撃情報。生息地を移動？』

『迷都、三大クランを含む大連合が第百層の主、挑戦へ』

『盟約の桜花』团长、王国北方を荒らしまわっていた炎の特級悪魔を討伐』

……世の中、依然として物騒極まりないわね。

クラン、というのは、一定数以上の冒険者達が寄り集まって作られる団体だ。

【盟約の桜花】は大陸西方に勇名を馳せている最精鋭クランの一つ。上位龍や特級悪魔討伐にすら成功している。



私も何時か、そんな冒険者に――。

「お待たせしましたっ！」

そんなことを受付の台に片肘をつきながら考えていると、ジゼルが戻ってきた。

片手に持っていた小箱と封筒をそっと机の上に置く。

小箱には清楚な白のリボンが丁寧に結ばれていて、封筒も見ると高貴品。極薄の紅色の花弁が象られている。

魔力は放っていないし、危ない物ではなさそうだけど……。

「……これは？」

私は何だか嬉しそうな表情の担当窓口に向う。

「……ここから先は内密にお願いしますね？ 実はずね、これ、本当はエルミア先輩のお仕事なんです。ただレベッカさんも御存じの通り、この数週間、帝国東部へ出張中で。支部長に相談したところ、レベッカさんなら依頼して良い、と」

私はギルド職員でありながら制服をメイド服風に改造し、担当すら持っていない、存在自体が謎の白髪ハーフエルフ少女を思い返す。

確かにこの数週間、姿を見かけていない。

……いれば、色々と相談――……ち、違うしっ！

あ、あんな子に、べ、別に相談することなんてないしっ！ 頼りにもしてないしっ！

……でも、いてくれたら一緒に食事に行けるのに。

私は内心の想いを見せないようにしつっ、ジゼルへ素っ気なく返す。

「……あの似非メイド、しょっちゅう帝都や迷都へ行ってるみたいだけど……辺境ギルドの一職員に、そんな用事があるの？」

ジゼルが一生懸命、弁明する。

「あ、あれで、お仕事は出来る方なんですよ？ 顔も広くて、帝都や、西都、迷都だけでなく、帝国外のギルドの偉い人達とも、顔見知りみたいです」

「……俄かには信じられないわね。で？ 私は何をすればいいの？」

私はジゼルへ再度問いかけた。

すると、こちらはきちんと制服を着ている担当窓口が胸を張った。

「冒険者になりたての頃よくやりませんでしたか？ おつかいです！ ここは基本に立ち返ってですね、先輩の秘密を私と一緒に探ってみましょう！」

「………帰るわ」

踵を返して外へ。

すると、少女は受付脇から飛び出して行く手を阻んできた。

げんなりしながらも顔をジゼルに向けると、思ったよりも真剣な表情。  
「レベッカさん……もしかして、これを単なるおつかい、誰にでも出来ること、と  
なめていませんか？」

珍しく挑みかかってくるかのような声色。私は尋ねる。

「……違うわけ？」

「違いますっ！ これはあの先輩が……隙あらば私に仕事を押し付けて、決まった仕事  
持たないあの先輩が、誰にも渡してない仕事なんです！」

……嗚呼、なるほど。疲れているのね。

私はこの少女と出会って以来、一番優しく声をかける。

「……分かったわ。今度、たつぷりと愚痴を聞いてあげるから」

「！ え？ レベッカさんが依頼の件以外で私とお話をしてくださるんですか？！  
し——もしや話を逸らそうとしてます？」

「……………」

私は思わず視線を逸らす。

思ったよりも気付くのが早い。でも……確かにちよつと気になる。

エルミアは、基本仕事をしないことで名を馳せている。

それでいて、ギルド内では謎の権力を持っていて誰も逆らえず、冒険者でもないのに、  
やたらと強い。

一度、迷都からやって来て事情を知らない第四階位がジゼルに絡んだ時、素手で叩きの  
めしたのには、戦慄を覚えたものだ。

——そんな、辺境都市の冒険者ならば誰しもが知っている、あの胸無しチビハーフエル  
フが渡さない仕事？

年上の少女が説明を続ける。

「先輩はこの件について、何一つ教えてくれません。聞こうとしただけで、わ、私の昔の  
失態を西都の両親へ一つずつ手紙で……うう……。わ、私だって、羽目を外す時がある  
んですっ！！ ま、毎回、毎回、お酒で先輩や、ギルドの人達に迷惑をかけてなんていな  
いんですっ！！ 酷いと思いませんか？ 思いますよねっ！！」

「……貴女、またお酒飲んだの？」

「……………」そ、その、ほ、ほんの少し。ギルド内の食事会の最初に、き、気持ちだけ……」  
ジト目で見やると少女は露骨に視線を逸らした。こう見えて、この子は酒癖が悪く、し  
かも脱ぎ癖もある……らしい。エルミアに聞いた。

溜め息を吐き、首を振る。

「……何回目なのよ？ で、分かっていることは？」

「そ、そんなに飲んでないですよっ!! あ、はい」

話を軌道修正して元に戻す。少女も咳払い。

「こほん。分かっているのは二つだけ。まず、品物と封筒が先輩宛に届きます」

「届くって、何処から？」

「大陸各地からです」

「……はあ？」

まじまじと、年上の少女の顔を見つめる。至極真面目な表情だ。

……嘘は言っていない、みたいね。

「帝国内だけじゃないんです。北も南も東も西も、何処からだってきます。この前は極東や南方大陸からも届きました」

「……誰が送って来てるわけ？」

「そこまでは。この封筒にも宛先としてうちのギルド名と、先輩の名前が書かれているだけです。開けたら法律違反になります。何が届いているのかも当然分かりません。けど、各地のギルドが許可していますし、危険物ではない——かな、と」

「あくまでも、予想、なのね」



置かれた封筒と小箱をしげしげと眺める。

そこには、差出人の名前はなく、宛名と一文。

『いい加減、席を譲りなさい（具体的にはわ・た・しに!!!）』  
と書かれているだけ。

この字と封筒、それにリボン。きつと女性ね。……席？

小首を傾げていると、職員少女が説明を継続。

「それが届くと先輩は荷物を持つてすぐ出かけられます。つい最近まで行き先は不明でした。が、秘密をどうしても知りたいというか、先輩の弱みを——こほん。先輩ともっと仲良くなりたないなあ」と思った、ギルド内有志がカンパを募り、高位冒険者さんに尾行してもらって、先日ようやく行き先を突き止める事に成功したんです！」

……冒険者は変人が多いけど、ギルド職員も似たり寄ったりよね。

額に手を置きつつ、呆れる。

「何をしてるのよ、あんた達は」

「し、仕方なかったんです。あの人、異常に警戒能力が高くて、非番の職員ではあつさり撒かれるか、からかわれるばかりで……。今回尾行をお願いした方も、第四階位だったんですよ？ その方でも、最後まで追跡は不可能でした」

「——で、何処まで分かったの？」

そう尋ねると、ジゼルはにやりと笑った。

……悪い笑顔。可愛い顔が台無しだわ。

少しだけ、ほんの少しだけ、私の妹に似てる。

年上の少女は私の反応には気づかず、言葉が続けた。

「依頼を受けてくれない限り、これ以上は話せません！」

私は両手を軽く上げる。

「はあ……分かった。受けるわ」

「ふふ。ありがとうございます。レベッカさんには、この小箱と封筒を街外れにある廃教会に運んでいただいて……そこに何かあるのかを確認してほしいんです！」

訝し気に確認する。

「……………それだけ？」

「はい。現状分かっているのは、先輩がそこに行つてるといふことだけなので……。帰る時、手ぶらですし、品物はその場所に置いてきているか、誰かに渡しているんじゃないかなと思っんです！」

「……これ、危ない話じゃないわよね？」

限りなく胡散臭い。

しかも、私がちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、苦手にしている怪談話の気配も漂う。  
……まさか、はめられた？

すると、少女は大きく頭を振った。

「むしろ良い話です。確定している情報は話した点だけですが……その廃教会には、以前から噂話がありまして……」

「噂話？」

「はい。えつとですねえ……」

ジゼルは制服のポケットから手帳を取り出し、捲りながら噂を教えてくれる。

曰く『辺境都市の街外れにある廃教会には奇妙な黒髪の男が住んでいる』

曰く『その男は、自らを【育成者】と自称し、嬉々として名乗ってくる』

曰く『その男に育成を頼んだ冒険者は皆、大陸級となり名を馳せている』

怪しい……とても怪しい。そんな人間がいるなら、誰も苦勞はしない。

第一、すぐ有名になって人が押し寄せるだろうに、そんな話は聞いたこともない。噂で

すら初めて聞いたし。

やっぱりこんな話は断って――。

\*

「しめないのが、私の悪いところ、ね」

今、私の目の前には廃教会がある。

確かに古びてはいるが、思ったよりもボロボロじゃない。

でも、見たところ屋根も壊れているし、敷地自体は大きいみたいだけどこんな所に人が住んでいるわけ？

錆びついて壊れている表門のアーチを潜り、敷地内に入る。

まだ真昼。……お化けの気配はなし。

『エルミア先輩が廃教会の中に入って行くところまでは確認が取れています』

ジゼルの言葉を思い出しつつ、教会の扉をそっと押す――開いてる。

覗いてみると中は意外な程、広かった。

割れたステンドグラスから十分な光が入ってきて明るい。  
少なくとも見える範囲には人影はなし。気配や魔力も感じない。  
木製のベンチが幾つか置かれている。

一番前のそれには毛布？ ……はっ！

「まさか、あの似非メイド。さほつてここで昼寝を？」

「普段は奥で昼寝してるよ。それはこの前、エルミアを見張っていた冒険者君の持ち物じゃないかな？」

「ああ、なるほど。ここで見張りを——……」

ん？ 私は今、誰と話しているの？

ゆつくりと後ろを振り返る。

すると、穏やかに笑う、小さな眼鏡をかけた細身の青年が立っていた。

「やあ、こんにちは」

「……………」

青年は軽く左手を上げてきた。



見たところ二十代前半。大陸では極めて珍しい純粋な黒髪。背はやや高めで、黒の魔法衣と中には白いシャツを着ていて、手には食材が入った大きな紙袋を抱えている。戦闘する意思はなさそうだ。

それにしても何時の間に……。

警戒する私に対して、朗らかに問いかけてくる。

「買い物で外へ出てみたら、こんな可愛らしいお客人と遭遇するとは。さて、僕に何か御用かな？」

いきなりの遭遇に動揺する。とりあえず、素直に回答。

「ギルドからのお遣いで……」

「お遣い？」

「え、ええ。宛名は違うけど……これ、貴方宛なの？」

布袋から小箱と封筒を取り出し、見せる。

青年は私に近づき、困った表情を浮かべた。

「こういう品を持つてくるのは、あの子の仕事にしているんだけど……。まさかこの仕事さえも人に任せるなんてね。今度、お灸をすえないといけないかな？」

「？ オキユウ？？？」

「ああ、こつちの話。助かったよ、ありがとう」

青年がにこやかに答える。

……なんか変な奴だ。調子が狂う。とつとと帰った方がいいわね。

封筒と小箱を見せる。

「はい、これ。後で揉めるのは嫌だし、紙にサインをくれない？」

「ちよっと待ってね」

男は外套のポケットや懷をまさぐり……困った顔。申し訳なさそうな声で告げてきた。

「ごめん、手元にペンがないんだ。中でするよ。お茶も飲んでいくといい」

「い、いや私は……」

「いいから、いいから。ここで会ったのも何かの縁。偶には君みたいな可愛らしい中堅冒険者さんと話すのも面白そうだ」

青年はそう言っ表の扉を押すと、魔教会の中にさっさと入って行ってしまった。

なんなのよ、あいつ。……正直、入りたくない。

けど、サインを貰っていないし、少し興味が湧いているのも事実。

先に奥の部屋へ入っていった青年を目で追う。意を決して、私も扉の中へ。

「こつちだよ、早くおいで」



奥から声。どうやら、居住空間は別らしい。  
 だけど……そんなに奥行きあったかしら？ 疑問を感じつつも追いつき、尋ねる。

「ねえ、どうしてこんな所に住んでいるの？」

「単に巡りあわせかな。あと、案外部屋が広くてね、物置に便利なんだよ」

「物置？」

「見てもらった方が早いかな。さ、どうぞ」

そう言つて、やけに重厚な黒い扉を開けた。

扉には精緻極まる紋章が彫り込まれている。これって魔法陣？

でも、魔力は、何も感じないし、見たこともない。

「？ どうかしたかい？」

「……何でもないわ」

強がりつつ扉を潜り抜けると、そこには――

「!？」

私は立ち竦み、青年が楽しそうに笑う。

「ふふふ。その反応、初々しくて嬉しいね」

「な、何なの、よ、こ、これ……」

そこは、まるで博物館のような場所だった。

言葉が出てこず、周囲を見渡す。

天井はアーチ状になっていて、凄く高く、所々に色鮮やかなステンドグラス。

そして、天井に届くほど高い巨大な木製の棚、棚、棚。それが数十列も続いている。

手前の棚に収められているのは、無数の剣、槍、斧等の武器。私が持っている剣とは格

が違ふ。全部、魔剣、魔槍、魔斧の類なんじゃないの、これ……。

身体が自然と細い通路に引き寄せられていき、

「慣れないで入り込むと迷子になるよ？ 気になるなら今度、案内しよう。今日はこっ

だけを通っておくれ」

という青年の言葉を受けて、止まった。

振り返ると通路なのだろう、一列だけかなり広めに幅が取られている。

おっかなびっくり青年の後をついていくと、その通路だけでも次々とんでもない物が

目に飛び込んできて、心臓がその都度、動揺してしまう。

明らかに上級と分かる魔石や宝石の原石が無造作に置かれている。こんなの実家にいた時でさえ見た記憶がない。

その横の棚には強い魔力を帯びている無数の本がずらり。あの青い表紙の本。しかし



て禁書じゃ？

そうこうしていると、生物由来の素材がまとめられている棚の列が目に入ってきた。  
 牙、爪、毛皮、骨——どれもこれも、私が何時も狩っているような魔獣じゃない。素材  
 なのに凄い魔力を——……え？ 一抱え程の大きさの深紅の鱗の前で立ち止まる。

……まさか、そ、そんな……恐る恐る近づく。

先を進む青年へ問いかける。

「ね、ねえ……これ、龍の鱗……じゃないわよね？」

「ん？ ああ、それかあ。炎龍らしいよ。『仕留めそこなった！』って手紙が来てたね」  
 「……………」

何を言ってるのか理解出来ず茫然とする。

龍、龍と言ったのか、この男は。

冒険者を志したならば、誰もが倒してみたいと夢想する、あの龍と。

青年の顔をまじまじと凝視する。先程と変わらず、そこに驚きはない。

彼はただだけ困った表情を浮かべると、歩を進めながら、言い訳じみた口調で語り出す。  
 「昔、後押しをした子達が未だに色々と送ってくるんだ。手紙だけで良い、と言っても、  
 みんな聞き入れてくれなくてね……。また、棚を増やさないと」

その瞬間、私はジゼルを思い出した。

『その男は【育成者】を自称している』

『その男に育成を頼んだ冒険者は今や皆、大陸級である』

……まさか、本当に？

私が目を離せないでいると、青年は小首を傾げた。

「どうかしたかな？」

「あ……な、なんでもないわ」

「そうかい？ 多分、今日、君が持ってきてくれたのも似たような品じゃないかな」

「……！！」

思わず持っている小箱を凝視する。

え……？ こ、これも……？

「さ、行くよー」

「あ、う、うん」

そのまま進んで行った先にあったのはまた重厚な扉。木のような、金属のような素材

……材料が全然分らない。

あと、どう考えても、魔教会の敷地以上の広さなのは……魔法？

でも、こんな魔法が存在するなんて、聞いたことも……。

青年は私に構わず扉を開け入っていく。私は慌てて追いかける。

——そこは整理が行き届いている居住空間だった。

年代物の木製テーブルと椅子が数脚。ゆったりとしたソファ。多くのジャムや茶葉が保管されている硝子棚。台所も設置されている。

青年が手に持っていた紙袋をテーブルに置くと、食材を出して棚へ仕舞っていく。

天窓から陽の光が柔らく差し込んでいて、眩しい。

窓の外には花々が咲き誇る広い内庭。鼻腔を花のいい香りがくすぐる。

きよろきよろしていると笑い声がaggattた。

途端に恥ずかしさが込み上げてきて、思わず青年を睨んでしまう。だけど彼は特に気にした風もなく、一枚板のテーブルの傍の古い椅子に座るよう勧めてくる。

「そこに座って。今、飲み物を淹れてあげよう」

「……結構よ。すぐに帰るから」

「そう言わずに飲んでおいきよ。とても美味しい珈琲だよ？ 甘い物もつけよう」

美味しい珈琲！

私の故郷であるレナント王国では紅茶よりも珈琲がよく飲まれていた。

けれど、帝国では紅茶が主流。結果、珈琲はとても高い……。

まして、ここは辺境。美味しい珈琲は然う然う飲める物ではない。

私は誘惑に抗えず、おすおすと頷く。

それを見た男は満足気。口笛まで吹いている。

……龍を倒すような冒険者の師匠には、とても見えないわね。

椅子に腰かけたものの、男が珈琲を準備する間、手持ち無沙汰なため、周囲を観察する。綺麗に整頓されている部屋。私が泊っている宿の部屋よりも余程綺麗だ。

本棚には古びた書物が並んでいる。

興味をひかれ、本棚に近づいてしげしげと眺めてみる。

手前にあったのは、百数十年以上前、全世界を旅したという世界最高の射手が記した大旅行記『千射夜話』。これは私も読んだことがあるわね。この世界の形を私達が何となく分かっているのは、この本の影響が大きいと思う。装丁が随分古い。

他にも『六英雄と三神 その時代背景について』『八六合戦始末 序』『大魔導全書』『偽錬金術大全』『螺子巻き街発展記 上』など……分厚い怪し気な古書がずらり。帝国以

外の物も多い。

間には脈絡なく絵本。

小さい頃、母に読んでもらった、子供向けの英雄譚がある。

ふん……こういうのも読んだ。少し可愛らしい。

思わず笑みが零れ——ふと気が付く。あれ、ちよつと、待つて。

私、客観的に見たら——、

(見ず知らずの男の自宅に連れ込まれてる!?)

棚に手がぶつかり、がたん、と椅子が音を立てる。

台所から青年が心配そうに話しかけてきた。

「おっと。大丈夫かい?」

「だ、大丈夫よっ!」

過去最大の動揺。家族じゃない男の部屋に入った経験なんて今までにない。

息を整え、木製の椅子に座る。

するとちよつと珈琲を淹れ終えた青年が、カップをテーブルへ置いた。

「何か気になる本があったかな? はい、どうぞ。お口に合えば良いけれど」

「あ、う、そ、その……」

「変な子だなあ。さ、お食べ」

青年はカップと一緒に、お菓子が載った小皿を差し出してきた。

三角形に切られていて白い? 真ん中に苺が載っている。

「食べたことあるかな? ショートケーキと言うんだ。帝都では売っている店もあるみたいんだけど。珈琲が冷めない内にどうぞ」

「……………」

普段の私なら、こんな得体のしれない男に出された物を口にはしないだろう。

でも……でも、嗚呼! 懐かしい、珈琲の香り!

小さい頃、母さんにミルクと砂糖をたくさん入れてもらって飲んだのを思い出す。

それに……「?」と小首を傾げながら私に微笑む黒髪の青年。

……何でかしら、彼を見ていると信用しても大丈夫だと思ってしまうのだ。

まあ、いきなり毒を盛られやしないだろう。大概の毒対策もしているし。

お皿に添えられた可愛らしいフオークを手に取り、小さく切って、お菓子を口に運ぶ。

——瞬間、大衝撃を受ける。

何これ！ 何これ！！ 何これっ！！

白い部分はとても甘いクリーム。土台部分はスポンジで、中にも苺と白くて甘いクリームが層を作っている。どういうケーキなの？？

こ、こんなの食べたことないわ。お・い・し・いゝゝ

はあ、幸せ……。世の中に、こんな幸せになれるお菓子があるなんて……。

今日の依頼受けて良かった……。

夢中になりつつも、小さい頃からの習慣通りに、フォークとナイフで綺麗に切りながら食べていると、穏やかな視線を感じた。

「美味しいそうに食べるねえ。作った甲斐があったよ。僕のもどうぞ」

青年は笑顔で二個目のショートケーキが載った小皿を差し出してきた。

……はっ！

わ、私は、な、何を、何を!?

——……ケーキは食べたいし受け取るけど。

「う……………あ、ありがとう。そ、その、と、とっても美味しいわ」

「良かった。はい、サイン」

青年はペンを右手で回しつつ、左手で小さな紙を差し出してきた。

……すっかり忘れてたわ。

受け取り、代わりに封筒と小箱を手渡す。青年が名乗った。

「自己紹介もまだだったね。僕の名はハル。育成者をしてるんだ。ここで知り合ったのも何かの縁だし、役に立つ助言はあるかな？ 第八階位冒険者のレベッカさん」

「結構よ。有り体に言って、あんた胡散臭い——……!？」

！ どうして、私の名前と階位を知って！

私は咄嗟に腰の剣に手を伸ばそうとして——止めた。

そして、ふっーと息を吐くとフォークを握り直し二個目のショートケーキを小さく切つて、口に運ぶ。

青年は目を丸くしつつも楽しそうに言う。

「おや？ 斬りかかってくると思ったのに」

「……美味しいお菓子を食べる方を優先しただけよ。こんな時に、無粋な真似はしないわ」「それはどうも」

笑顔で勧めてくる青年。こうして近くで見ると童顔だ。一見、人族だけど……外見通りの年齢じゃないだろう。

長命種の代表格であるエルフやドワーフ、獣人でもなさそうだ。

着ている服はかなりの高級品。それと先程見たあり得ない品の数々と、本棚に置いてあった古書からも、こいつが只者じゃないのは分かるわ。

敵意はなし。単に歓待しているだけ。私への視線は最初から穏やかそのもの。

もしかして、いい奴……なのかも？

……って、違うっ!!!

あ、会ったばかりの男に、何、気を許しかけているの、私は！

誤魔化すように質問。

「……どうして、私を知ってるの？ それと……単刀直入に聞くわ。あんた、エルミアとどういう関係なわけ？」

「さーで、どうしてだと思う？ ああ、エルミアは……他人様に説明するのは難しいね」

こいつと私は初対面。それは間違いない。黒髪は目立つ。一度会えば印象に残る。

と、なると……

「……エルミアの入れ知恵ね」

青年はカップを掲げた。

「正解。あの子とは、毎日、お茶の合間に色々な話をするんだ。君の名前はよく聞いてたから、すぐ分かったよ。『捨て猫がずっと拗ねてる。助けてあげて』ってね。こういうや

り方をするとは聞いていなかった」

「だ、誰が捨て猫よっ!!! ……けど、エルミアがそんな……」

「意外かい？」

私は毎に、フォークを突き立てる。

「……不吉ね。何時もなら『面倒くさい。私は眠い』だけで終わるもの。話は、その、た、たくさん聞いてくれるけど」

「言いそうだね。君への助言は後ですとして、ちよつと失礼するよ」

青年はそう言う、こちらの返答を聞かないままに封筒をペーパーナイフで開け、読み始めた。

中身は予想通り手紙らしく、文字を目で追いながら時折笑い出す。まるで子供からの便りを喜んでいる父親みたい。若い男が見せる表情じゃない。

読み終わると次は小箱を手にとった。表のリボンを解き、蓋を取る。

すると——恐ろしく強い魔力の波動があふれ出す。

「きゃっ！」

「ああ、ごめんごめん」

紅い波動が肉眼で見える程だ。これは炎属性？

今まで感じなかったのは小箱に封がしてあったせい？

こ、こんなに強い魔力を封じていたっていうの!!

……こ、こんなの、並の魔法士が出来ることじゃないっ！

私は驚愕して声も出せずにいるのに、青年はいとも簡単に小箱から綺麗な紅色をした小さな硝子玉のような物を取り出して少し苦笑した。

「……また大変な物を送ってきたなあ。この前、話したことを覚えてたのか」

「ね、ねえ、それは何？」

おそらくは魔石。しかも、恐ろしく質の良い。

競売にかけたら、金貨数百じゃ……そんな私の予想を軽々飛び越え、青年はあっさりと、口にした。

「炎の宝珠だよ」

「……は？」

呆けた声が出た。各属性宝珠と言えば、魔法媒介の素材として超一級品。魔法を扱う者であれば、生涯で一度は手にしたい、と思う類の代物だ。

帝国西方で発見されて以来、二百年近く経つても未だ踏破されていない、ローグランドの次元迷宮——通称『大迷宮』を抱えている迷都ラビリヤ産のそれが名高いが、入手は極めて困難だと聞いている。

何しろ階層の主を討伐しないとイケないのだ。

その強さは龍程ではないにせよ、上位冒険者のみで構成されたパーティが複数組集まっても苦戦すると聞く。

それ以外の入手方法は、特級以上の龍か悪魔を討伐。つまり、まず無理だ。

ただし——希少な分、効果は極めて絶大。

宝珠を組み込んだ武器は、属性に応じて大きな魔力と耐性が得られ、著名な冒険者や、騎士、魔法使いの装備品には大抵これが使用されているらしい。

迷都で年に二、三度出品された際こちでも話題になるくらいだし、取引額は最低でも金貨数千枚。私は、ギルドの報告書をよく読んでる方だと思うけど、ここ最近、競売にもかけられていない筈だ。

つまり——この宝珠が本物だとするならば、ギルドを通さず、ソロ、もしくはパーティ、克蘭が直接送って来た、ということになる。

そんな物を平然と？ しかも、さっき自分が運んできた箱の中に？

……偽物の可能性が高いわね。

青年が笑い、宝珠だというそれを渡してきた。

「あ、信じてないね。直接、手に取ってごらんよ」

「ち、ちよっと」

私は慌てて両手で受け止める。

圧縮された恐ろしく強い炎属性。も、もしかして本物？

それにしても、本当に綺麗……。

宝珠の人氣は圧倒的な効果とその美しさにある、と聞いてはいたけど、納得する。

——ひとしきり眺めていると、何時の間にか青年が三本の棒を持って横に立っていた。それぞれ材質が違うように見える。

「納得したかな？」

「……確かに本物みたいね。だけど、こんな貴重な物を送ってくるなんて、何者なのよ」

「さつきも言ったけど、昔後押しした子達が律儀に送ってくるんだ。みんな、立派になってくれてね。今回は僕の失敗なんだけど」

「失敗？」

「この前、王都を久しぶりに訪ねた時、話しちゃったんだよ。『炎と水の宝珠を探してい

るんだ』って。今度、お返しをしておかないと」

……もう、訳が分からないわ。

こいつの話は概ね事実らしい。

だけど、付き合っていたら私の中の常識が音を立てて壊れるばかり——

「さて、これを見してくれるかな？」

青年が、こちらに持ってきた三本の棒を見せてきた。……今度はなんなのよ。

一つは木製。内部に光が瞬いているように見える。

やや短い二本目は、灰色。何かの骨……？

そして、三本目は明らかに金属。けれど、凄く魔力を感じる。

それぞれの先端には、何かをはめ込む為なのだろう、数ヶ所、穴があいている。

数えてみると七ヶ所。どうやら、杖の試作品らしい。

黒髪の青年が聞いてきた。

「どれが良いと思う？ 直感で選んでおくれ」

「——木ね」

「ふむ。了解」

そう言うと、虚空から五つの宝珠が次々と出て来て穴にはまってゆき、残った二本の杖

は手品みたいに消えた。

……待って、時空魔法を使えるのにも言いたいことは多々あるけど、目の前にあるこの杖は何？ 何なわけ!?

私の目がおかしくなっていないなら、これは――。

青年がニコニコしながら、促してきた。

「さ、はめ込んでごらん？」

「……………」

恐る恐る、空いている穴に炎の宝珠をはめ込む。

宝珠が合計で――六つ。残りの穴は一つ。

「うん、様になってきた」

「ね、ねえ……こ、これ、この杖って……」

「ん？ 材料があつたからね。杖もほしい頃合いだったし、作ってみたんだ。まだ水の宝珠が足りないんだけど、完成したら、おそらく大陸内にも一本しかない七属性宝珠付き世界樹の杖になると思うよ。七つ目をはめる際には調整が必要そうだし、西都へ行かないと……そうだ。これも何かの縁だし、完成したら名付け親になってくれないかな？」

「!?!?!」

――人間は衝撃が大き過ぎると、言葉そのものを失う、というのを実感する。

目の前の杖の土台に使った材料は、私みたいな冒険者なら知らない者はいない代物だったからだ。

\*

世界樹――それは大陸中央にそびえる大樹。

かつては、世界に三本あったらしいけど、現存しているのは一本だけ。

伝承によれば、三百年以上前の『魔神大戦』終結後、一本が枯れ、世界を滅ぼそうとした『魔神』に挑んだ六人の英雄を救い、力を使い果たし天に帰った『女神』がこの世界からいなくなった際、もう一本も枯れ落ちたそうだ。

辺り一帯はハイエルフの神域になっていて、立ち入るのも難しく、帝国皇帝が命じても拒絶されたと聞いている。

結果、素材を手に入れるのも至難で、極々稀に、冒険者ギルドへ持ち込まれる程度だ。

歴史上、世界樹の枝を使用し、実在したと認定されているのは伝説の魔杖『導きし星』のみ。



今、目の前にあるのはそういう代物だ。

何処の地点の枝を使っているかまでは分からないけど、この杖には六つの属性宝珠も付いている。

さつきから、ずっと白昼夢でも見てるんじゃないかしら。

頬つべたをつねってみるけど……痛い。これは現実だ。

この短時間に、幾つ『最高峰』を見せられているわけ？

椅子に腰かけた青年は珈琲を飲んでいる。

こ、こいつ……。

「変な顔だなあ。滅多にない機会だし、持ってごらんよ」

「え？　ち、ちよっと！」

青年が杖をこちらに手渡してきた。

持った瞬間、悟る。

——……ああ、本物だ。

自分の中で魔力が著しく活性化している。

今なら普段使えない属性の魔法も使えてしまいそう。

それこそ——私が使えない雷魔法だって。青年が微笑み、左手の人差し指を立てた。

「一つ目の助言をしようか。レベッカは、炎だけじゃなくて雷を使った方が良いね。苦手にしているみたいだけど、君の適性は雷だよ」

思考が一瞬止まる。私の適性が『雷』……？？

青年に問う。

「……………どうして、私の属性を知ってるの？」

「ふふ、僕は育成者だから。見れば分かるのさ」

幾らあのエルミアでも、冒険者にとって命綱の情報を他人に話さないだろう。そういう子じゃない。

確かに私は炎魔法を得意にしているし、雷魔法はまともに使えない。

それを何故？　しかも、適性が雷寄り？

手品の種は……私は杖を握りしめる。

「この杖ね」

「またまた正解。それを持つと、魔力が活性化するから驚かすには便利なんだ。全部揃えばもっと活躍してくれるだろう。君は賢いね。大体、どんな子もこころへんで剣を抜いた

り、魔法を展開したりするんだけど」

「……斬<sup>き</sup>りたいの？」

目を細め殺気を匂<sup>にお</sup>わす。

青年の顔は穏<sup>おだ</sup>やかなまま。対応しようとしてもしていない。

カップを持ったまま、片手を軽く上げた。

「酷<sup>ひど</sup>いなあ。褒<sup>ほ</sup>めてるのに」

「からかわないで！……お暇<sup>いとま</sup>するわ」

そう言い、杖を返す。

手に張り付くような感覚。まるで、杖が意思を持っているみたいだ。

先<sup>さきほど</sup>程の倉庫に置かれていた物といい、この杖といい……尋常<sup>じんじょう</sup>じゃない。

話せば話す程、常識は崩壊<sup>くわいかく</sup>していく。関わるのは——危険過ぎる。

私が築きあげてきた『世界』の中に、こいつはあつさりと入り込んできてしまいそうだ。

……そんなの、怖い……。

私の葛藤<sup>かつとう</sup>を知ってか、知らずか、青年は気安く誘<sup>さそ</sup>ってきた。

「夕食も食べて行けばいいのに。御馳走<sup>ごちそう</sup>を作るよ？ エルミアの話も聞かせてほしいし」

「……結構よ。あと、あの似非<sup>えせ</sup>メイドの話をする悪趣味<sup>あくしゆみ</sup>は持てないわ」

「そうなのかい？ エルミアは毎回、楽しそうに話してくれたから、仲良しなんだな、っ  
て思っていたんだけど。ああ、夕食後にも珈琲と甘い物も出すよ？」

！ エルミアが私の話を楽しそうに??

心が温かくなり、少し顔がにやけそうになるのを抑<sup>おさ</sup>えつつ断る。

「……け、結構よ！ あと、べ、別に私はエルミアと仲良くなかないっ！……ま、ま

あ、少しは喋<sup>しゃべ</sup>る方<sup>かた</sup>だけど」

青年は肩を竦<sup>すく</sup>めた。

「そうか残念。なら——代わりに二つ目の助言をしよう。魔法剣を使いたいなら今のまま  
じゃ永久に駄目<sup>だめ</sup>だよ。君が成長するには、さっきも言ったように、炎魔法じゃなく雷魔法  
が鍵<sup>かぎ</sup>だからね。炎魔法の成長は雷魔法を究<sup>きわ</sup>めた後でも出来るさ」

瞬間、抜剣<sup>ばつけん</sup>し本気の斬撃<sup>ざんげ</sup>。寸止めすら考えていない。

しかし——

「!？」

「危ないなあ」

私の剣は、目に見える程強力な魔力障壁<sup>しやうへき</sup>で阻<sup>はば</sup>まれていた。

刃が進んでいかない!?

動揺を押し殺しながら、距離を取り、剣を構える。

「……誰に聞いたの?」

「誰に聞いたと思う?」

笑みが逆に腹立たしい。

——魔法剣とは武器に属性魔法を付与し、攻撃力を飛躍的に向上させる技のことだ。習得すると、普通の武器では攻撃が通らない強大な魔獣にも対抗出来るようになる。龍や悪魔、年老い力を増した魔獣などの上位種との長い長い闘争の果てに、人が編み出した接近戦の術こそ魔法剣であり、上級前衛職が習得する気闘術なのだ。

私の目標——冒険者の高み、第一階位へ到達するには必須となる技。

第八階位に昇格してから、私は魔法剣を習得しようと努力してきた。

だけど、その取っ掛かりすら未だに得られていない。

……誰も知らない……エルミアにだって、まだ話してはいないのにつ!

黒髪の青年が私を評する。

「君は少し背伸びし過ぎだね。魔法剣や気闘術は習得に時間がかかるんだ。そのせいで他

を蔑ろにすると、全部台無しになる」

「つ……! なら、どうすればいいって言うのよ!」

「その助言が欲しいから、今日ここに来たんじゃないのかな? エルミアに聞いていた君の性格からして、普段は『魔教会に育成者が住んでいる』なんて噂、本気にしないだろう?」

「……………」

そういう気持ちじゃなかった、とは言わない。

噂話を信じた訳じゃなかったけど、今は何にでも組みたいというのが本音だ。

けど……剣をひき鞘に戻し、問う。

「貴方に師事すれば、私は成長出来るって言うの?」

青年は眼鏡を取り、布で拭きつつ頷く。

「勿論。そうだね、第五階位にはあつと言う間に上がれるんじゃないかな? 僕は蒙船でもなければ、泥船でもない。実績もあるし」

「……冗談としては度が過ぎてるわね」

「冗談のつもりはないよ。君には素晴らしい才能がある。それを磨かないのは余りにも惜しい。どんなに良い原石も、磨き方次第で輝き方が変わるのだしね」

何のてらいもなくそう話す青年。本気みたいだ。

……ほんと、何者なのだろう、こいつは。

どうして、会ったばかりの私をここまで評価してくれるのだろう。

両親も、親族も、血の繋がった人達は、誰一人として、私を信じて、まして、背中を押してなんか、くれやしなかったのに。

私は、ずっと、ずっと、ずっと一人で……これから先も、一人で……強くないといけないのに。

青年はテーブルに両肘をつき、にこやかに告げた。

「ま、そう深刻に考えなくてもいいよ。一先ずお試しでどうかな？ 最近は余り教えていなかったけど、何せエルミアの推薦だ。あの子が、わざわざ僕に人を紹介するなんて、滅多にないんだよ？ 何年振りだろうなあ……記憶にある限り、サクラ以来かな？ その前だと、ハナとルナだし」

「サクラ？ ハナとルナ……？ ……エルミアの推薦……？」

私は思わず言葉を繰り返す。

『サクラ』『ハナ』『ルナ』。

この名前……確か冒険者ギルドの報告書で読んだ……まさか、ね。

私は立ったまま珈琲カップを手にとろうとし——青年が新しく淹れ直してくれた。

一口飲み、おずおずと尋ねる。

「……『サクラ』って、【盟約の桜花】の団長さんじゃない？」

「ん？ 知ってるのかい？」

「……じ、じゃあ『ハナ』って、迷都最強クラン【薔薇の庭園】団長……【灰塵の魔女】？」

「そうだね。数ヶ月前、迷都へ行ったら副長のタチアナも随分と成長していたよ。異名は何だっかな？ 確か【不倒】——まあ、彼女については、僕は殆ど関与していないけど」

「……………」

意識が遠くなる。

三人共も現冒険者の頂点とも言える剣士、魔法士、樞役だ。

そんな人達の師であり、関係者!? この青年が!?

残っていたショートケーキを行儀悪いけれど大きめに切り、頼張る。

ここまで来たら、最後の一人についても聞かないといけない。

「……………『ルナ』って【天魔士】の……？」

いや、まさか、ね。流石にそんなことは。

けれど、青年はカップと皿を重ねつつ、あっさりと頷いた。

「そうだよ。今じゃ僕よりも遥かに強くなっちゃったね」

——【天魔士】

それは、魔法士の頂点にして至高の存在だ。いうなれば……大陸最強後衛の称号。  
もう、訳が分からない。

そうこうしている内に、黒髪の青年は杖を置いたまま内庭に出て行き、私を呼んだ。

「さて、腹ごなしに模擬戦でもしてみようか。君の実力をもう少し見せておくれよ？」

……落ち着いて、落ち着くのよ、レベツカ。

この男が何者かは分からないけど、取っ掛かりが欲しいのは事実だし、コツだけ聞き出してみて、それが有効なら活かせばいいじゃない。

エルミアも、私を気にかけてくれてたみたいだし。……推薦って何よ。事前に言ってくれてもいいのに。

心中で白髪美少女に文句を言いつつ、私も広い内庭へ。

花壇を背にし、黒髪眼鏡の青年と少し距離をおいて相對する。

すると、青年は懐からペーパーナイフを取り出した。

「……何のつもり？」

「全力で攻撃してきてくれていいよ。ああ、花達が可哀想だし、剣だけでね。魔法障壁を張らせたなら君の勝ちだ。なお、僕は動かないし、直接反撃もしない」

「へえ……舐めてくれるじゃない」

齒軋りし、剣を抜き放つ。

無銘だけれど、実家を飛び出して以来、私を支えてくれた愛剣をそんなペーパーナイフで受けようなんて……痛い目を見させてあげるっ！

——風が吹き、静寂が私達の間に満ちた。

「行くわよっ！！！！！！」

私は叫び前傾姿勢で疾走し、間合いを一気に詰める。

そして、地面すれすれから、逆斜め斬り。

普通なら、この一撃で腕まで持っていける。

——が、

「！？！……」おっと、危ない」

私の斬撃はあっさりと青年に弾かれた。嘘でしょ!?

それでも、跳ねあがった剣を続けざまに振り下ろしたのは、幼い頃から延々としてきた訓練の賜物だった。上段からの全力斜め斬り。

激しい金属音。

愛剣が悲鳴を上げ、いつの間にか、濃い黒に染まっているペーパーナイフに再び弾かれた。漆黒の小さな稲妻が周囲に飛び散る。

雷の、魔法剣!?

青年は左手で眼鏡を直しながら、賞賛してくる。

「御見事！ 正統レナント王国流剣術の連続技だね」

「くっ!!!」

これは模擬戦だ——という考えがなくなり、至近距離で容赦なく斬撃を繰り出す。

が——駄目。悉く防がれてしまう。まるで、全部先読みされているかのように。

胸の横薙ぎが逆手に持ち変えたペーパーナイフで受け止められ、青年を睨みつける。

「思ったよりもずっと練り上げられている。レベッカは真面目な子なんだね」

「舐めない、でっ!!!!!!」

叫びつつ後退し、剣を真正面に構える。

……この男、私よりも遥かに強い。おそらく、私の父よりも。

でも、私は負けられないっ！ 負けられないっ!!

地面を強く強く蹴り、身体強化魔法を全力発動。過去最高速で連続突きを放つ！

私の愛剣をペーパーナイフがあっさりと迎撃。全て受け流していく。

「ん？ 普通の連続突きだとつまらない。途中、途中で斬撃を交ぜ——」

「これでっ!!!!!!」

青年の指摘が終わる前に、剣を寝かせ突きから斬撃へ変化させる。

これは——躲せない。

間違いない胸を薙げる。避ける為には障壁を張るしかない。勝った！

——次の瞬間、私の愛剣は黒電を放つペーパーナイフによって、断ち切られていた。

剣身が空を舞い地面に落下。突き刺さる。

……嘘、でしょ……？

青年が拍手をする。

「今の一撃は良かったよ。君の剣技は基本に忠実でとても流麗——……え、えーつと、レ、レベッカ？」

「……………」

私は少し離れ俯く。身体が勝手に震えてきた。

地面に涙が落ち、染みを作っていく。抑えられない。

この剣は、私を支えてくれた唯一の……『相棒』だったのだ。

さつきまで余裕綽々だった黒髪眼鏡の青年が、慌て始める。

「あ……そ、その、ち、違うんだっ！ な、泣かすつもりはなくて、ね……困ったな。子猫を相手にするのは久しぶりだったもんだから、加減が分からなくて」

「ぐすっ……わたし、子猫なんか、じゃ、ない……」

涙を袖で拭いつつ私は青年を睨みつけ、文句を言う。

明らかに動揺した様子で隙だらけだ。

自然と——身体が動いた。

「わたしは、あんたなんかに、負けないんだからあああああ……！！！！！！」

私は半ばから折れた剣を最上段から振り下ろす！

魔力が剣身を伝い急加速する初めての感覚。青年の瞳が大きくなった。

「おおっとっ!!」

私が繰り出した生涯最高の一撃は——青年の両手に挟み込まれ停止していた。

焦げたペーパーナイフが、剣身の脇に落下し、突き刺さる。

眼鏡の奥の瞳が優しく私を見つめた。



「エルミアが気に入るわけだね。初めての模擬戦で両手を使われたのも久しぶりだ。今日はここまでにしておこうか」

「……………」

私はゆっくりと剣をひき、鞘へ収めた。

……本当に折れちゃったんだ。私の剣……。

心が沈み、酷く落ち込む。

青年は突き刺さっている剣身とペーパーナイフを抜き、私に声をかけてきた。

「ごめんよ。剣を折るつもりはなかったんだけど……君が思ったよりも強くてね」

「！……本当、に？」

黒髪の青年と視線を合わせる。

すると、強い肯定が返ってきた。

「強いよ。第八階位というのは信じられない」

「……そ、そう」

沈んでいた心が浮上してくる。我ながら単純だ。

——頭の上に、大きな白いタオルが降ってきた。

「顔を洗うついでに、お風呂にでも入っておいで。その間に僕は代わりの剣を選んで、夕

食を作っておこう」

「え？ で、でも……私……」

「折ってしまった剣のお詫びだよ」

青年が私を見つめる。そこにあるのは純粹な心配だ。

……エルミアと同じ。

私は顔を袖で拭い、返答した。

「……………分かったわ。それと、その——……ハ、ハル」

「ん？ 何だい？」

私は黒髪の青年へ向き直り、深々と頭を下げる。

「え、えつと……あ、貴方が強いのは分かったわ。だ、だから……その……い、育成、よ、よろしくお願いします。で、でも、効果がなかったらすぐ止めるからっ！ ……あつたら、ま、まあ正式な教え子になってあげても、いいわ」

青年が、くすりと笑った。

「任されたよ。【辺境都市の育成者】の名に誓って階段を上らせてあげよう。代えの剣と夕食は期待しておくれ。ああ、それと、レベッカ」

「？ 何？？」



青年——ハルは私へ笑いかけた。

「綺麗な髪なんだし、大事にした方が良いと思うな。昔、教え子が使っていた洗髪剤、使ってみるかい？」

「!??!?!」

え、えっと……き、綺麗って……あの、その……。

頬が赤くなっているのを自覚しつつも——……頷く。

すると、ハルは悪戯っ子のように微笑んだ。

——石造りのお風呂は今まで私が入ってきた中で、一番広く気持ちよいものだった。

どうやら温泉らしい。あと、洗髪剤は花の香りがした。

廃教会の何処にこんな場所が？ という疑問は棚上げ。理解出来ないし。

脱衣場には女子用の着替えが置かれていた。誰かが泊まりに来ることもあるのだろう。

【灰塵】とか【不倒】とかなのかしら？

お風呂上がりの牛乳も冷えていて凄く美味しかった。

豪華な夕食の間もハルとたくさん話をして……小さい頃、お母さんが生きてた頃以来だったかもしれない、あんな風に楽しい夕食は。

こういうのも偶になら、悪くはないのかも……と、思っていたら夜は更けてしまい、結局、その晩は私も泊まっていくことになってしまった。

しかも、宛がわれたのはエルミアのベッド。

何と、あの白髪ハーフェルフ、この廃教会で寝起きしているらしい。

ふふふ……良い情報を得たわ……。

だけど、当面、ハルのことはジゼルに内緒にしておかないと。絶対、根掘り葉掘り聞かれるし。

——そんなことを思いながら、私は数年ぶりに安らかな眠りについたのだった。

続きは、7月17日発売のファンタジア文庫で！

©Riku Nanano, Fukukitsune 2020